福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

山川登美子の歌(5)ー『おもかげ草紙』『花ちり塚』全訳ー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越野, 格 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3068

山川登美子の歌(5) ー『おもかげ草紙』『花のちり塚』全訳ー

越野格(*)

前稿に引き続き、山川登美子の全歌の通釈をめざして現代語訳を続ける。[註①] 今回は、『おもかげ草紙』の収録歌348～358、そして『花のちり塚』の収録歌、359～767が対象である。

その通釈の基本は、前稿で述べた通りである。即ち、登美子の歌を「現実離れの歌」とし、写実主義的、現実主義的、或いはモデル穿鑿的なアプローチからは、ひとまず距離を置くこと、あくまで「ぽうず」の歌、「こしらへもの」「観念」的な歌として、その構想、構図を考えること、言葉の並び、連結が「出まかせ調」で、「考へることの先に、作つてか、つてゐる」ので、下の句、最後の一段での急速な整頓、纏め上げに注意して「魂を捉へる」ようにして現代語訳すること、などである。[註②] ただ、詞書、添書的なものがある場合はこの限りではない。何れにしてもこれは私の心構えであって、実際は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。

今回も、意訳にしても逐語訳にしても、出来るだけ簡潔な現代語訳を心掛け、六十字以内に収めるよう苦心した。六十字以内とは、レイアウトの体裁上、訳文を二行に収める、との物理的な理由からでもあった。通し番号は『山川登美子全集上巻』(文泉堂出版、平6・1)に拠る。が、原歌は明示せず、現代語訳のみを記した。

全集に拠ると、『おもかげ草紙』には「友と我れと折にふれ物につけてなつかしの文のゆきかひ人なみ〳〵のものにあらず、夏の軒ばにしげりあふやさしの露のこのしのぶ草　明治三十六年三月より始めて　此ぬしとみ子」、との序がある。「我れ」は登美子、「友」とは増田雅子である。本来は「我れ」と「友のかへしに」、「友よりおこされたる」と「我れの返しに」、などといった贈答歌形式になっているが、今回は登美子の歌のみを現代語訳した。

『花のちり塚』について、坂本政親氏は全集の解説で〈本書の編まれた時期、ないし清書の時期は必ずしも明白でないが、収録された歌が「新声」「文庫」時代の初期のものから、いわゆる〝恋衣事件〟(明治三十七年十月頃)当時のものにまで及んでおり、さらにその筆蹟も前後ほぼ揃っているので、『恋衣』を発刊する少し以前

*福井大学教育地域科学部言語教育

の頃かと推定される〉、とした。既発表の歌もかなり含まれているが、字句の異同もあり、改めて新出の歌のつもりで現代語訳した。その結果、字句の異同がなくても前訳とは微妙に違った訳になった歌もある。しかしその違いについてはいちいち明記しなかった。その時点での自由訳ということで、全歌の訳が終了した時点で改めて調整、ないしは訂正をするつもりである。また原歌にある「詞書」は、そのままの形で現代語訳の後に付記した。

(1)『おもかげ草紙』

348　鶯は谷から谷に移って行きなさい。この花のない里に下りて来て鳴くのは、けっして許してはなりません。

349　貴女の御手を取って一緒に泣きたいものです。月の下で、また花の中で、世を憂しと思う卯の花が盛んに咲く頃には。

350　お待ちください、もう少し。花に小雨では憂鬱ではありませんか。私たち四つの袖が抱き合う、卯の花を照らすその月夜まで。

351　どうして貴女を忘れるでしょうか。桜、山吹、蓮華草など色とりどりに象嵌された玉の御筥に、貴女への想いを囁きましょう。

352　落ちて行く、羽に痛手を負った蝶々、その流す涙。落ち行く先は問わでも知れたこと、桜の木の根元にある菫塚です。

353　二月の月の下、散る花のごとく痩せ衰えていくこの私。秋の野で松虫、鈴虫が鳴く頃、さらに私は衰えていることでしょう。

354　高鳴る胸、沸き上がる血潮に、その高邁なる歌の端書き。貴女の茅渟での記念の歌は、虹に託して私にお送りください。

355　今日の日を昔の思い出として語り合う三人の者。情愛深く微笑んでいらっしゃる神様、その日が来るまでどうぞお待ちください。

356　色づいた靄を紅蓮に組んで積み立てて、二人して庵を作って住みましょう、めしい、みみしいの私たち二人は。

357　この世は私たちには辛過ぎます。しかし千島は遠い地の果てではありません。佐保の峰風を受け、小笹の舟で旅発ちましょう。

358　貴女、もし歌がおありならば、潮の気を吸って、そして一緒にお吐きください。私は当地で山に夕虹がかかるのを待ちましょう。

(2)『花のちり塚』

359　散った花々を掃き寄せた塵塚に風が吹き荒れています。箒を持て再び掃き寄せてくださる御方は何処にいらっしゃるのでしょう。

360　私の歌は、琴柱の張ってない小琴の端切れを、花の散る夕闇の中で探り寄るようなものです。

361　春は一体何処にいるのでしょうか。鶯は病んでしまい、紅梅の蕾は小さく、黒くもなってしまいました。

362　山柿の梢にうすく霜が置くのが見えて、秋の暮れ方の風の何と寒いことでしょうか。

363　遠くの山々の木立の間から疎らに雪が見えます。御簾を巻き上げて、この侘びしい風景を見ている人もいるでしょうか。

364　芭蕉の葉に淋しい音をたてて時雨が降り始めました。その時雨

の中に、むせび泣くような虫の声がします。

365 蝙蝠が飛び交う軒々が黄昏れて行き、夕月が白く空に掛かります。その暗闇の中に紫陽花が浮かび上がりました。

366 世を捨てて山に分け入った人が慕うのでしょう、深山を照らす月光の下で鳴く時鳥の鳴き声を。

367 幾重にも重なり立った霞の中を辿ってきました。夕暮れになってしまったので、私は花の下に仮寝をすることにしました。

368 都の客人を一夜止めてお聞かせしたいものです、我家の裏山に鳴く時鳥の声を。

369 腕の立つ絵師ですら描くのが難しいほどの眺めです、山々をかき暗くして降っているあの夕立の様子は。

370 音も立てず儚い浪が絶え間なく打ち寄せる浮世の岸に、私と同様に打ち寄せられた哀れな貴方を見ようとは思いませんでした。

371 私は故郷に思いを寄せる一心で越えてきました、この狼の鳴く夜の木曽の山道を。

372 糸を紡ぎながら歌う媼の唄も長閑に聞こえます、霞が棚引き、花が咲き匂うこの山里の村では。

373 指をさして何を語るのでしょうか、幼い子が手折った小萩を母親に捧げながら。

374 花を摘んで家路を急ぐ乙女子の、その袖の香りを慕って春の夕風が追いかけて行きます。

375 百合の花を嗅ぐとはなしに嗅いでいつの間にか微睡んでしまいました。その時に見た夢の何と気高いものであったことでしょう。

376 心に思うことをただ徒に磯に書いて、打ち寄せる波が消すのに任せました、千鳥の鳴く夕方の浜辺で。

377 鳥籠を下枝に掛けて、乙女子が桃の蕾を数えて見るのでした。

378 去年の春、蝶を葬った桃の木の根本に、菫の芽が出てきて、そうして花が咲いたのでした。

379 永遠に覚めないで、と蝶が囁いた、あの花野で見た夢の、何と懐かしいことでしょう。

380 貴方、この私の胸に手を当てて見て下さいませ。この胸に不思議な響きがするのは、一体何なのでしょうか。

381 私の手作りのイチゴです。これを貴女に含ませてあげましょう、その口紅の色が落ちるほど一杯に。

382 私が何気なく摘んだ草花の名が優美であったので、その花は誰に贈るつもりなの、と友は微笑んだのでした。

383 筆を折り、歌反古を焼いて、その立ち上る烟に乗って、私は今すぐにでも飛び去りたいのです。

384 あなたは見なかったでしょうか、百合の露を吹いていた夕風が神の御声を花に伝えていたことを。

385 どことなく私の弾く琴の調べも掻き乱れています。人に会うのも恥ずかしくなる今日この頃です。

386 夕顔に置く露の雫を受けて墨を摺り、歌を書きましょう。琴の緒が切れて、何かと物思いに沈みますこの夕べに。

387 月の照る夜に、姉にも言わないで、明日咲く朝顔の花に歌を結んできたのでした。

388 髪を結って挿しましょう、と言った白薔薇も、残らず散ってしまいました、私が病んで伏せっている枕元に。

389 直接に手に取るには余りにも清い歌なので、絹に包んで私の胸に秘め置きましょう。

390 神様に奉る初穂を持ち、晴れの赤帯を結んでもらって、母のみ手に導かれて、私は産土の宮にお参りしたのでした。

391 お母様の写真を抱いて昨夜も寝ました。楽しいものです、故郷の夢を見ることは。

392 月光の下、葡萄を一房摘み取りました。それを扇に乗せて貴方に差し上げ、御歌を所望したのでした。

393 野原に出て、小百合に置く露を吸ってみました、私の涸れた血の気が胸に湧くかと思いまして。

394 一刷毛で描いた墨絵のように見える暮れゆく小島。その小島に小鳥が群れ飛び、淡い虹がかかっています。

395 百日百夜の間、聖書を持って山に籠もり、霊妙な歌を得ました。しかし、それを決して他人には示しませんでした。

396 垣根伝いに萩が咲き、その下を流れる僅かばかりの小川の水。その小川の水に、私は恥じらう頬を冷やしたのでした。

397 受け取ることのできない方からの手紙を海に投げやりました。しかしそれは沈みもせず浮きもせず、中途で藻に絡まりました。

398 口笛で子羊を呼んだり、鞭で子羊を追ったりして過ごす牧場生活。その中で出来上がった歌を、私は口ずさむのでした。

399 露に濡れた蝶の何と優しいことでしょうか、瓜畑の実にならないあだ花にさえも一巡りして来ました。

400 空を被っていた雲が切れて、その間を星が流れました。私は心に秘めていたことを神に祈りました、夕暮れの空を見上げて。

401 歌を書きましょう、と蓮の葉を折ったところ、藕糸の中に小さい声がしました。何のささやきなのでしょうか。

（住吉の蓮池に歌の子ら相集まりて）

402 神様から沢山の美しい小琴を頂きました。さあみなでうち集まって合奏し、神様を讃えましょう。

403 市人たちの冷たい笑いに堪えきれず、私は持って行った薪も売らず、欲しかった米も買わずに山に帰って来たのでした。

（市といふ題を得て）

404 お姿を胸に思い描くばかりで、直接御手をとることもなかった貴女。そんな貴女に、私は今日悲しみの歌を奉ります。

（見ぬ友の死を悼みて）

405 指輪を土に投げ捨てて微笑んだ、涙の流れる女の顔。その顔の何と美しいことでしょう。

（美といふ題を得たる時）

406 誰のために摘んだという訳でもないこの百合の花。聖書の上に載せて絵に描いてみましょう。

407 世間の風は私の薄肌には寒すぎます。哀れと思うならば、しばし貴方の袖の蔭を私にお貸しくださいませ。

（友の許へ）

408 美しい衣も薔薇の簪も投げ捨てて歌に狂うということは、何と楽しいことではないでしょうか。

（友の許）

409 鋭い鎌で刈られるのも構いません。私は刈られて、貴方の背中

の籠でせめて匂いましょう。　（友の許）

410　弱々しい花が風に吹かれて悩んでいる、とお聞きになったら貴方、手折ってお抱きくださいませ、塵となってしまう前に。

（友の許へ）

411　琴の主へ、と書き添えて白百合をくださったお方を、今日私は垣間見たのでした。

412　琴の上に白百合の花が一枝載せてありました。しかし何方がくださったか知る手掛かりがありません。

413　子供たちをみな踊りに出して残った年寄り二人。若かった頃の恋を語り合った、そんな夕べでした。

414　花に置いた露の香りが移れとばかりに、私は白芙蓉の花に口づけをしました。貴方の歌を収めた小箱に入れる、その芙蓉の花に。

415　触れることさえも痛ましいと思っていた百合の花を、わけもなく手折ってしまった今日の私でした。

416　私の手で摘んで髪に挿したひと花でしたが、貴方にその名を問われて花も私も顔を赤らめたのでした。

417　誰のために作っている花輪なの、とあの方は、笑いながらことさらにその名を私にお問いになるのでした。

418　妹の簪にしょうと摘んでいた花でしたが、その花のことがとても気になる今日この頃の私になってしまいました。

419　忘れないで、と口に出して言うだけでも優しく聞こえるその草の名です。私はそれを貴方のお襟に秘かにくけたいものです。

420　人の気配に後ろの小簾を振り返ったが誰もいませんでした。私は耐えきれず裂きました、泣きながら縫っていた衣の切れを。

421　手作りの葡萄酒で貴方を酔わせ、都の歌を是非一曲、と私は強く所望したのでした。

422　微笑みながら、私たちは炎を踏みましょう、征矢も受けましょう。世間の人よ、安らかに眠っている二人を、さあご覧ください。

（物に激したるとき）

423　月明かりの下、姉が手折る萩の花。その萩の花に置いた露のこぼれは、私がこの手で受けましょう。　（友と遊びて）

424　手も触れないのに琴柱が倒れて恨めしそうな音がし、折からの秋の夕風に乗って響きました。

425　紫色が恥ずかしくなってしまいました、私の袱紗さばきをあの方に褒められてからというものは。

426　薄月夜、薄明かりの中で、貴方と呼びかけた私。その私の被布にサラサラと音を立てて花が散り掛かりました。

427　貴女の胸の中の花が欲しいばかりに、貴女の話に耳を傾け泣いてしまいました。私の方こそ泣きたいほどの状況でしたのに。

428　初めての恋をしている姫君の文箱。その紐の結び目に挿してある白百合の花の何と美しいこと。

429　それは夢でしょうか、いいえ幻です。私は目を閉じて色美しい靄に巻かれてしまいました。

430　秋の暮れに血で濡れた十字架を指さしてはなりません。私が抱いている羊は決して檻には返さないつもりです。

431　手すさびに私が結び合わせておいた、門に立つ糸柳の葉。誰が

したのでしょうか、その上の葉をさらに結んでありました。

432 あれから三年が経ち、今年も秋が来ました。私は躊躇しながらも、秘めて置いた貴方からのお歌を水に浸けてみたのでした。

433 悲しみにくれて徒に摘んで散らした薔薇の花。しかしそれをさらに踏みにじることは、心弱い私にはできませんでした。

434 付きまとう愛犬も追い払って、私は出掛けました。哀れにも一人で花野で泣こうとする心から、そうしたのでした。

435 私ゆえに貴方をお泣かせするのをお許しください。弱き女の身に、今秋の暮れが落ちていきます。

436 筆を噛みながら歌を作ろうと苦心している私の額に、花の露をまき散らす貴方。貴方はなんと悪戯な方でしょう。

437 淡紅の芙蓉の花で露を包むことができたならば、それを女神の御髪に注ぎましょう。

438 人の世の物にあらずと、雲に乗って星の女神が取りにいらっしゃる歌。それが私の理想の歌です。（理想の詩といふ題）

439 偽りで濁る私の涙が袖にかかるならば、この袖を断ち切って、私は決して貴方にお会いしないつもりです。（友の許）

440 旅の者たちが脚絆を捲いて旅している大和川。その大和川の緩やかな流れの中に歌の声があります。（泉なる友の許へ）

441 決して思うまい、見るまい、聞くまい、頼みにするまい。今にも雨が降りそうな空に、秋の歌を歌っている、その貴方の歌を。

442 貴女は御覧にならなかったでしょうか、貴女の燃えるような唇が触れてから、その白蓮に露が湧き出してきたのを。

443 羽子板や手鞠などをみな母君に隠されてしまいました。肩上げを下ろした後の針目の跡が淋しげにみえます。

444 紅筆でもって添削に苦慮している、そんなお歌はよそにして、貴方、その紅筆で雪の兎に目を点じておやりなさいませ。

445 温んだ緩やかな流れに袖をつけ、頭は雲に被われている夕陽。あたかもそれは悩んでいるかのように見えます。

446 冬の間、絹手鞠を編んでいましたが、白いままで春が来てしまい、飾りの色糸がみな縺れてしまいました。

447 紅帷の中の秘やかなささやきに、戸口の星はそっと隠れてしまいました。

448 柔らかな蝶の羽交いを上にして菫が揺らめいています。蝶は曙の香りがする菫の露を吸っています。

449 立てかけて置いた琴の緒が低く響きました。貴方の袖の端が少しも触れてはいないはずなのに。

450 歌を結び付けた花に小雨が降り、寒い風が吹いています。この夕暮れには、琴柱を外しましょう。

451 脱ぎかけた私の衣被がそよと音をたてました。所々に花びらがこぼれ敷いている紅梅の庭でのことでした。

452 匂やかに雪洞を被う女官の振袖に伽羅の香りをさせて、梅壺を風が吹き渡ります。

453 未だ春は寒い。そんな中、梅の蕾をそっと撫でて、病む鶯が戸口に忍び寄って来ました。

454 笹を滑り落ちる雪の降る夜、私は歌を作りかねて転寝し、風邪

を引いてしまい、朝の祈りの時に姉を泣かせてしまいました。

455 大変狭い、糸の通らないほど狭い袖口を、花の中よりお出になり、お覗きになる悪戯な神様がいらっしゃいます。

456 私を睨み付けながら説きました、国に対する恨みごとを。大規模な雪崩の前に立って、泣きながら弟は。

457 雪が五尺も積もる中、可愛がっている馬に鞭を当てて、昔何かと私を泣かせた、その弟の歌う唄が響きます。

458 髪が抜け落ち、乱れてみすぼらしい前髪に、私は緋鹿子絞りの切れを結びました、春の夕暮れの中で。

459 春の雲よ、まだその瞳を未来に対する喜びで輝かしてはなりません、と私は袖を持って被いました、幼い鶯の鳥籠を。

460 あの高嶺の花を散らすまで、あなたと私は空で凧が縺れるように、運命の糸で手繰られる身なのでしょうか。

461 連続する雪崩の音がしばし鳴り響きます。その中にただ微かに飛び去る鷺の声が聞こえます。

462 雪に伏す葦の中の傾いた杭。その杭に鶺鴒が止まり、夕日を受けて雨を呼ぶかのように鳴いています。

463 岩に寄り掛かり、袖を強く噛みしめながら、私は海上にかかる雨上がりの虹の色を数えたのでした。

464 何故なのでしょう、と私は高鳴る胸元を見つめては、また嗅ぐのでした、白百合の花の匂いを。

465 今乗ってきた彼方は満開の桜の中に、これから向かう先は霞の中に消えています。岸からは渡しを呼ぶ人の声が聞こえます。

466 私が結んで置いた歌は、あの方の項に触れたでしょうか。月が隠れ、花売りの君の吹く笛が、今急調子になって行きます。

467 芭蕉はまだ若々しい。その葉陰を通して丸窓から細い月が差し込み、文机の上の桃の花一枝を照らしています。

468 貴方の肩の雪を払い、獲物の多さを寿いで銃を受け取りました。そして、お酒の用意が出来ています、と私は言ったのでした。

469 人々が朝の祈りをするにはまだ早い時分、梅の木陰に伏す小さな庵が、靄の中から浮かんで来ました。

470 地図を広げれば、そこは死に場所として相応しい、広大なところです。若者よ、貴方たちには少し大きすぎるでしょうか。

471 シベリアでは春風は吹いたでしょうか。私ももはや今年で十六。どうぞ、貴方、早くお帰りになって私をお召しくださいませ。

472 少し濁った水際に咲く菫を摘みかねて、私は袂を濡らしてしまいました。菫を添えて送るつもりの袂の歌も濡れました。

473 朝月がさす渓に、風が吹き渡りました。梅の木蔭の庵に眠るその人の夢を、いっそう清々しいものにする朝風です。

474 傘を傾けて振り返った貴女。満開の花の中、お持ちになった梅の一枝をそっと投げ捨てながら。

475 この冬、丹精こめて育ててくれた方のお名前は言いますまい。でも、春には小さい紅梅の花が、辺り一面見事に咲くでしょう。

476 雪解けを照らす夕日の中で、私は泣きましょう。馬は飢えて鈴の音が寒々しく響き、梅の花も散っています。

477 静かに小さく小鼓を払う狩衣の袖に、散りかかって匂いたつ白

478 梅の花。その花のなんと美しいこと。

479 笹舟が紅梅、白梅の花びらを乗せ、神様に見守られて春の川を流れていきます。

480 梅が散っていく、その土の匂いに心惹かれましたので、私は小褄を払って梅の木の根に寄りました。

481 都より昨晩、絵葉書の花便りが届きました。散らし書きした文字も淡い桃色でした。

482 シベリアでは春風は吹いているでしょうか。貴方の影身膳をしている我家の軒端には、梅の花が咲き始めました。

483 貴方なしに私一人で咲かせた花。それを貴方宛の文袋に入れました。ここに吹く春風はどこまで遠く吹いていくのでしょうか。

484 神の支配する闇の世界が明け、また人々の明るい朝の声が戻ってきました。真っ白い梅の花にも朝日の色が射し添えています。

485 鶯はその若々しい瞳で花を愛でている様子。さて、この私の悩みはどうしたらよいものでしょうか。

486 ああ、貴方の御霊はどこにいらっしゃるのでしょうか。移し植えた桜もちらちらと夕暮れの風に散っています。

487 日の御座を包むように、八つの入り江は紫に輝いています。私の瞳に映る夢よ、もう少し続いておくれ。

488 この里に私をただ一人泣かせたままにして、神様は何処へいらしゃったのでしょうか、春の子をお連れになって。

489 杖は折れてしまいました。帚木も消えてしまいました。それにしても私の行く手は、なお雲です。遠い雲の彼方です。

490 麦を引き抜いて作った笛。その恨み泣くような響き、吹く私の息がはずみます。この麦笛は一体何処まで響くのでしょうか。

491 人は待つまい、頼みとするまい、と決心したものの、辺りは暗く雲は低くたれ籠めたのに、私はあの方を待ち続けたのでした。

492 行く手は遠く険しく、こんなにも必死に辿っているのに、どうして人は私を指さして笑うのでしょうか。

493 思い捨てましょう、脱ぎ捨ててしまったあの濃紫の袂のことは。でも夕陽が消えたこの春の夕べはまたなんと寒いのでしょうか。

494 新潮に玉藻が打ち寄せて鳴る音。その美しい音を誰が知るでしょうか。紅を付け初めたその日から、浦の乙女が知るのですよ。

495 私は人の世の情けに堕ちてしまいました。風よ、私に吹き下ろさないでおくれ。遠くの山には未だ雪が残っているのです。

496 雲は赤く染まっています。花も風に乱れて散っています。そんなことを言い訳に、それなら二人でこの衣を被りましょう。

497 貴女は十四。早くも畑打ちの唄声が余りにも美しいので、この村一体がその噂で騒がしくなりました。

498 父の血を受け継いだこの私。お父様から守刀を頂き、その御前で何とお答えしたら良いのでしょうか。

499 ただ単にその日のことを思い出すだけの品物ではありません、この兎の首輪、紅いリボンは。

500 女神の冠を飾る白百合の花。せめてその一片として美しい色を添えてみたい、それが私の願いです。

この私はただ歌を詠むだけしかできない子です。この私はただ

恋に盲目で、技巧など弄せない子なのです。

501 菫が咲きました。タンポポも咲きました。お兄さま、ツクシはもう半尺ばかりに大きくなってしまいました。

502 何重にも巻かれた戒めの荒縄、それらを隠し被われて曳かれゆくこの方。掟の前で叫んでいるこの方。

503 何となく悲しくなって、私は折角摘んだ花を握り散らして蝶の羽にかけました。

504 地に私の影が写り、空には愁いを帯びた雲が浮かんでいます。夕陽は雲に遮られ、鳩は依然として眠ったままです。

505 松が多くありました。沢山の思い出がありました。貝も多くありました。高師の浜で見た夢の何と多かったことでしょうか。

506 今はただ貴方ゆえに私は生きている、とお思いにならないでしょうか。それにしても恋しく、その時のことが懐かしいのです。

507 私の播いた餌を睦まじくついばむ鳩を見て、歌を作ろうとしています。ほんとうにこの頃の罪のない私ですこと。

508 殊更に紅ひもを選んで足に結んでやった鳩が、この夕べ帰らないことになってしまいました。

509 あの時のことを思い出して、思い返して、鏡に映る我身を見て、ただ一心に私はあの方をお待ちしようとしています。

510 今日、明日の夢は、所詮夢として捨て去れるのに、去年のあの日々はと、誰がまたそれらを呼び覚まそうとするのでしょうか。

511 人に知られないように涙をぬぐい、紅をさして曇る鏡に我身を映す、そんな手すさびをしてどうなるものでしょうか。

512 人目を気にして、さようならと、御手を取ることもできない私。そんな私に後毛が痛くなるほど強く夕暮れの風が吹き付けます。

（人のかど出のときに）

513 どんな世界でも又尽きる時が来ます。そんな無情の地の私に、誰が陽炎のような夢を問い寄ろうとするのでしょうか。

514 貴女に送るはずの花をそっくり小兎の首輪に飾らせながら、この花で飾る貴女の襟元を思い描いております。

515 萩が咲きました、朝顔も咲きました。兄君よ、百合は文箱に添えて飾るのに相応しいほどの大きさになりました。

516 白虹がかかる千丈もの天空を手繰り寄せて来て、誰がお治めになるのでしょうか、私の時代や人々の世界を。

517 そうだ、というその判断は、神の判断のごとく絶対的なものではないのに、いつしか人の運命を決めるものとなってしまいます。

518 母のことは何も知りません、父は百里の遠くにいます、と指をさし、小萩を折る乙女子の袖に秋風が吹き寄せます。

519 琴の弦が切れ置かれ、何方もいらっしゃいません。ただ御簾に寒風が吹き寄せ、空しく琴の空鳴りがしています。

520 枯れ果てて落ちた松葉は最後の一葉。このように、私も命の終わりを静かに待ちましょう。

（物に激したる時）

521 袖を噛んで、萩の葉が枯れる季節に別れてきました。この寒風に打たれて私はいつまで泣き続けるのでしょうか。

522 胸に押し当て、そして拝んで透かして見れば、遠くの月が黒ずんで見えました、この守り刀越しに。

523　何ゆえか、しきりに出る涙を人に知られるのをはばかり、私は籠の中で飼っていた鈴虫を萩の花に放ちました。

524　奉ります、過ぎ行く秋を恨みに思う名無し草を。萩の葉末の露が取るに足らない私にもかかりましたので。（萩の舎先生の許に）

（お亡くなりになった先生に捧げます、私の拙い歌を。先生のご講筵の末席を汚しました私ですので。）

525　逃れ入った御袖の蔭で、秋風のこと、去年の夢のことなど、沢山のお話を私にお聞かせくださいませ　（同じく）

526　こうして人は世間を恨んだものでしょうか。私は髪を乱し、鋏を求めて秋風の前に立ちました。　（物に激して）

527　何かと過ちの多かった十年を決して悔いてはなりません、冷たい秋風はどこの野にも吹くはずのものですから。

528　哀れにもこの世の恋に悩んで私の髪が乱れたのではありません。絵絹にどうさを引いていて乱れたのです。

529　何をするにつけ、親は恋しいものです。親はまた子供ゆえに平穏ではいらっしゃらないでしょう。

530　とにかくもこの世に生きていよう、と思うその瞬間にも、私の目ぶたに吹き当たる秋風。その何と冷たいことでしょう。

531　生き延びたこの一年を恨みに思いながら、私は野分の風に身を委ねています。

532　いつまでも吹き止まぬ、去年のことを恨んで吹く秋風でしょうか。その風には同じ枯れ野に置く露の涙が含まれています。

533　父上、母上のささやきはどのようなことなのでしょうか。私はこの春もまだ肩上げは取るまいと思っていますけれども。

534　父上がいらっしゃったら、母上がいらっしゃったら、これほどまでに私は泣かないものを。　（ある秋）

535　牛を追う鞭の調子にも漸く慣れて、私は朝夕を送っています。牧場を渡るそよ風に一層上手に唄が響きます。

536　子はここにいます。母上はいかがお過ごしかしらと、百二十里離れた故郷の夢から覚めた秋の夜半。母を頬りに思っています。

537　欄干に依って雨に濡れていたあの立姿を、流し棹の人よ、鴨川の舟の上から遠く見上げなかったでしょうか。

538　時雨が降る中、小刻みに踏む私の足は速く、袖は重い。鬢を吹く風よ、寒さを吹きかけないでおくれ。

539　まだ残る札所は二つ。紀三井寺は暮れ、落葉の中に休らう母は疲れの余り立ち上がることが出来ませんでした

540　京は暮れて、道を問う私の指にさす紅の色。折から紫野を照らす月に、私の持つ文箱も恥じらっているようです。

541　夕闇の中、御堂の笑いが途絶えてしまうのならば、秋の風よ、薄に吹くその冷たい風をしばし待っておくれ。

542　歌を詠もうと言いながらうたた寝をなさっている貴方。その文机を叩こうとしているのでしょうか、山時鳥が鳴いています。

543　鶯が春の水を餌猪口に待っています。生憎水が切れましたので、絵の具を溶く貴方、ぜひその水をくださいませ。

544　衣を被っても被っても、依然として血は漏れ出ました。ああ、人の世の衣というものはなんと肌に痛いものなのでしょうか。

（ある秋死なむとて）

545 誰でしょうか、梅の蕾も堅い二月の夜、堅く閉ざされた柴折戸の中から木を削る音をさせているのは。経机を削るのでしょうか。

546 春霞がめしいの私に歌を作らせました。たとえ目を背けるような歌であっても、誰か声を合わせて一緒に歌いましょう。

547 水にほほえむ秋の気配を貴方は許さないでしょうか。取り交わす杯に帰り花が散っています。

548 差し掛けた小傘が一つ、水に映っています。菖蒲を取ってください、と貴方に乞う私の姿の、なんと恥ずかしそうなこと。

549 雨を呼ぶのでしょうか、この月の暗さは。でも月の光が暗くても、聞き漏らさせてはなりません、山時鳥よ、その声を。

（死なむと思ふ事有蘆花子の不如帰は吾れの自除（ママ）伝に似たり）

550 月の下で聞きましょう、磯なれ松の浜辺に打ち寄せる波の音を。俗塵も収まり、村は静まりかえっています。（吉浜に在ける時）

551 私に葡萄を含ませて貴方はその味をお尋ねになりました、葡萄を摘む手に短冊をお持ちの貴方は。

552 朝晴れの伊豆の島々に波が打ち寄せ合っています。私は昨晩よい夢を見ました。（吉浜にて）

553 伊豆にいる私は磯辺に字を書いて波を待っています、消えていくしかない儚い文字を引き消してゆく、その波を。（仝く）

554 伊豆の海に佇む二人の影は、あたかも歌か絵の中のようです。微笑み合う二人に波が静かに寄せています。（仝く）

555 何度試みたでしょうか。半ば波に身体を浸し、私は儚き恋歌を波に書くのでした。（仝く）

556 夕暮れ、船縁であの子は何を悩んでいるのでしょうか。海松目を負うあの子は、わが恋がうまくいかないのを嘆いているのです。

557 風をはらんで白帆が速く進んでいく伊豆の海。その波間に宵の明星の明かりが溶けていきます。（仝く）

558 紅色を溶いて玉藻の上に流したいものです、その浜辺に打ち上げられた片貝を拾う人が誰もいませんので。

559 吐く息が白くなって来ました。古い袷の裾も綻びてきて、貴方の病状も篤くなってしまいました。

560 貴女の御手をとって私は泣きたいものです、月の下で、また花の中で、世を憂しと思う卯の花が盛んに咲く頃には。（友への返し）

561 決して去りはしません、たとえ天を突く津浪が押し寄せて来ようとも。私は貴方のお墓の側に微笑んでいます。（みはかのほとりにて）

562 死出の山への旅は十万億土の彼方といいますが、今貴方はどこら辺りですか。雪の山坂を悩んでいらっしゃらないでしょうか。

563 どうしましょう、どうしたらいいのでしょうか。幻にも夢にも現にも恋しい、貴方へのこの気持ちは。

564 その影が地に映え露に動いていた、思い出の貴方。貴方は今どこにいらっしゃるのでしょうか、あの紫の星、にでしょうか。

565 今ここに至っては世間なく神なく仏もありません。私の運命はなにほどのものでしょう、神よ、その御手の斧をお振いください。

566　温めて御霊が帰るものならば、霜の置く寒冷の夜に、何十日も何百日も私の胸を御墓に貸して温めて上げようものを。

567　黒髪はふくよかに櫛で結い上げたいものです。髪を切った今は草で結び、短い髪の一春を送っています。

568　待つのでもなく、待たぬのでもなく、夕方の戸口で私は、他の方のお車をただ懐かしく眺めています。

569　御緦麻もありません。貴方に後れて病んで漸く癒えた今、私は墓守をしています。生き残った私の影さえも憎くなりました。

570　貴方の後を追ってゆけば追いつけるでしょうが、私はこのままこの世で満たされなかった運命の縁を少しでも待ちましょう。

571　土を掘る鶴嘴は思いのほか軽かったです。しかし私の心は貴方にお会いしたい気持ちで一杯です。

572　お召しになったのは何の御用なのでしょうか。花の夕闇で薄暗く、琴爪の小箱を御手づからくださるとのことですが。

573　私は狂ってしまったのでしょうか。この世は何と恨めしい世の中なのでしょうか。髪を解き捌き、風に向かって進みましょう。

574　燃えて燃えて擦れて消えて闇に入ってしまう夕映え。その夕映えに似ていないでしょうか、貴方の御姿は。

575　私は裾が消えて、蕊の真ん中に立っている、と覚りました。天上の香りを持つという、その小百合の蕊の中に立っていることを。

576　あなたと共に神を恨んで泣いた私、その私の姿をどうぞ見守ってくださいませ。今寂しい秋が暮れようとしています。

（友の許へ）

577　羊を屠り、贄牲の血潮が迸りました。穢し奉ります、どうぞお受け取りくださいませ、神々さま。

578　これほどまでに人の涙を弄ぶ呪詛の神に、私は征矢を射かけ奉ります。

579　白絹を重ね紅絹を重ねて御子を包んだ、その絹の匂いに満ち溢れています、天の戸張は。

（友の賀に）

580　神はここに一人の御子を天からお下しになりました。その後の栄えは神の御手よりもたらされることでしょう。

（友の賀におくる）

581　さすがに私は袖を振り払ってお断りする勇気がありませんでした。人目が気に掛かる、貴方から差し掛けられた春雨の中の傘を。

582　まだ覚めやらない私の夢は、霞となって野を越え山を越えて、花の咲く限りを漂っています。

583　宴が果てて私は袂を取られました。すぐに私はその酔顔を払うべく、白桃の枝を手に取りました。

584　音は小さく、微かに尾を引きながら、雲がたった今、星から離れて低く飛んで来ました。

585　少し前に不意に浮かんだ思いが、次第に堅い決心になりました。有り余る恨みを千嶋で泣こう、という堅い決心に。

586　人形の左手に持つ鑿、そこから発する香りが嬉しいものです。神様がお酔いになって御心を奪われた京の人形なのでしょうか。

587　乱麻を絶つその顔に、おごり昂ぶる春の狂気があります。人間を操作する運命の神の仕業でしょうか、操りの糸が見えます。

588 詩的な舞いでしょうか、それとも思い上がりの狂気でしょうか。
菫を踏んだ美しい神の御靴に、罪の花笠を被った、その舞いは。

589 生き返った七日の朝、その菫色の空の美しいこと。今はもはや、
神に媚びようとする私ではありません。

590 神の鞭、それを恐れ尊んだゆえか、神に憎まれたせいでしょう
か、私には生まれてこの方、幸せを数える指がありませんでした。

591 たくさんの試練に私は勝ちました。私はたとえ病んでも歌いま
す、自らを讃える歌を。[註③]

592 牡丹は散り果て、海棠はまだ細い、ある雨の夕暮れ。私は眉筆
を湿しました、鶯の猪口の水で。

593 海上七里相模を越えて、湯の香り漂うこの地にやって来ました。
気恥ずかしい旅で、私はまだ夫の名を呼び慣れません。

594 菫の咲く野でのこと。夢の中にいる子でしょうか、覚めた子で
しょうか。その病んだ瞳は、蝶にはぐれて漂っています。

595 帰り住みましょう、梅の咲く大森に。春を待たずに夫は亡くな
りました。私は一人憂き旅に残され、遠く百里で泣いています。

596 葦の江に無心の水が打ち寄せます。雲が低く浮かぶ夕暮れ、西
の彼方百里を思いながら、私は長い吐息を漏らしています。

597 緋桜の蘂に隠れ息を潜めて、御便りを奪おうとする蝶よ、お前
には髭は無いのですか。

598 どうして忘れることが出来ましょうか、桜、山吹、蓮華草など
色とりどりに象嵌された玉の御筥に、貴方への恋を囁きましょう。

（友の許へとて）

599 確かに罪深いですが、病気になるほど気に病む罪ではありませ
ん。私は菫に置いた曙の露を盗みました。

600 柔らかい御手に許された花の命。その花が私に託され萎れてし
まいました。それほど恋は人を熱くするということでしょうか。

（友より得たる花しほれたり）

601 花に伏す蝶の骸に罪着せて、と小唄が歌われる中、春雨が琴柱
に細かに降りかかっています。

602 酔った私の罪を、花のせいにするかのように暖かく吹く春の風。
その春風が戸張を窺い、綾を揺らしています。

603 雨や風に御墓の荒れは如何ばかりでしょうか。百里西にいる私
は、もぬけの殻の日々を送っています

604 御霊が星に去ったのであるならば、私は大森の沖の汐となりま
しょう。月の引力で汐が引いて、天に至る道もあるでしょうから。

605 一年にわたる看病の末に得ました連作の数々。恨みごとの歌の
多い中で、喜びで輝いているのはどんな歌でしょうか。

606 空にかかっている虹すら小さいものです。貴方を想う私の恋心
は、大地軸に半球がかかっているほど大きく残っているのです。

607 地上に一人残されました。泉は涸れ花も枯れて荒れすさぶ園生
に、何を守って私は生きていったらいいのでしょうか。

608 泣いている私を、七千百里彼方の波の上に置いて見ると、我身
のことで無いようです、昨年はあれほど泣いた私ですのに。

609 蜜に熱中すると、牡丹の花には熱がさめて意識が薄れていきま
した。輝き残った私は、なお蝶となったままで蜜を吸っています。

610　舞台の余韻を残しながら歩く御室は、夏木立に風が吹き抜けていました。熊野の能衣装を脱ぎ捨て、飾らぬ姿で歩いた御室は。

611　今日は七日、座禅をした梅の香の匂う夜は明けました。私は一掬の水を飲みました、座禅を終えて膝を立てたその時に。

612　マリア様の御裾にすがりましょう。どう治療していいのか分かりません。朝の祈りの時に梨の花が散りました。

613　解き放った髪が肩に冷たく、梨の花も冷たく降りかかる夜の出歩き。私の恋もこのようでした。世間の評判もこのようでした。

614　紫の細打紐に、世にある限りの温かい光を盗られたかのようです、この春の寒の戻りの寒いこと。

615　小さい身丈で仰ぐには、余りに虹は遠くにあります。しかし、女が二十を過ぎたならば、その虹を仰ぎ見るべきです。

616　同じ旅をする道連れに、たとえ道の片方は譲ったとしても、女よ、相手に賢き名の評判をとらせてはなりません。

617　小督仏にすがり仏門に入ったとしても、その境地は京の雲の果て、悟りは難しい。雪の降る千島こそ私の歌には相応しい所です。

618　撲たれてもその痛さは我慢出来ましょう。しかしどうして諳んずることが出来ましょうか、我が師も泣いた女大学の文字を。

619　日が暮れて寒々しい竈を前にして泣いたとしても、幸せを求め続けましょう。今の世で涙に暮れない女なんかいるものですか。

620　世に三人いるという聖人、その聖地を訪ねて何を賞賛しましょうか。荒れた牧場に子羊の肩が震えています。

621　子羊の皮を被った狼が牧場に安閑と暮らし、やはり聖人の答を逃れている状況。それがこの世の実情なのです。

622　数々の思い出を恨みにして私は死にましょう。鞭の傷跡を隠せとばかり、着物の袖は女には長いのです。

623　それが御心ならば、乙女の運命をここでお伺いしましょう。蛇の衣が這う白百合の花の運命を。

624　神の姿も悪魔の姿も一人の女の中に現れるものです。闇の中でその裏の心中を尋ね見てください、そして日の下で表の心を。

625　女は弱いものです、との声が不意に厳かに響きます。そして黄金の轍を遺して雲が走り行きました。

626　人は幾万年も世にある懐疑を晴らす智慧が足らず解決出来ずして、華厳の滝で智慧の子、懐疑の子の命を奪ってしまいました。

627　歌を憎んでいた、去年の私の日記を先ず手始めとして、蛇の衣が這います、白百合の表紙に。

628　人の道だからと、不平不満に思いながらも何事も包み隠せば、私の名は傷つきません。しかし漲る胸のそれは夜な夜な呻きます。

629　私に考えを押しつける人の言葉や世の慣習は、私の胸を焼き、命を食い殺す虫なのです。

630　世間が下々の私にどのように強いても構いはしません。暖かい太陽も知らず土を掘る土竜のように、私は生きるだけです。

631　弱き子の私は天を指す指も毒に病んで震えています。地には蛇苺が高々と繁茂しています。

632　啄木鳥さながらの、その人の口捌きの巧みさ。地の上二尺、貴方は世間の寵児です。

633 闇を抜け出た此処こそは、夜のない芸術の国です。今日私は先ず脱ぎます、六塵の衣を。

634 このようにして夢は現にまた勝ちました。私の魂を取りに来てください、白百合の花で絡め取って。

635 身を屈めて縋り、裂けようとする胸から出た笑みなど軽々しいものです。笞に泣き叫ぶ子、それが女大学の国に住む女です。

636 露の置くのを待つこともなく、月の出を見ることもない宵時の露草。その草の名に値しないまま、ただ散れというのでしょうか。

637 写真の二人は、同じ恨みを懐いている同胞同士でしょうか。二人同じく、春にやつれ、秋にやつれています。（友の許へ）

638 先ず百合に若き乳房の貴女の姿を求め、そして私は襷を掛けて仕事にかかる、そんな秋の日を送っている、とお思いください。

639 兄に所縁の軒端に咲く忍ぶ草に、秋の訪れの露が置いています。私も兄を想って袖を濡らしています。（兄上追懐）

640 繰り返し尽きぬ兄上の思い出を綴りたいものです。夜中にすだくコオロギの声のなんと悲しいことでしょう。（兄上追懐）[註④]

641 雲に現れる秋の愁い、その愁いを深くこめている芭蕉の葉。その葉陰は泣くにも忍ぶにもよき処です。

642 頸に胸に腕に耳に、簪として、裾飾りとして。黄菊や白菊の花々を全身に飾られたその御姿は、花の化身のようです。

643 聖戦の船の帆綱に錨綱に、どうかこの千筋の黒髪をお召しください、悪魔にも絡みつく私の黒髪を。

644 飢えて今は血も流れませんので、書くものにも力がありません。人よ、私に魔という文字を教えてください。

645 古鏡が霜の寒さに割れてしまいました。しかし木霊はありません。こんな夜は鴉が鳴いて黄泉に帰るのでしょうか。

646 保ち続けられない才能、それは旨酒が罅の入った甕に入っているようなもの。それに似ているのがこの人です。

647 窶れはしませんでした。しかし春を呪うのが当然の私の髪なのですから、目を塞いで知らん顔しましょう、尺に余る緋牡丹には。

648 真っ白の羽の鳥に含ませた、花一枝。どうか、武蔵の彼方十里にお住まいになる貴女の許に落ちますように。

649 髪を撫でて鏡を覗きたい夜もありました。夢の中で摘みましょうか、簪にするその白花を。

650 聖壇に祀ったこのうら若き贄牲を御覧ください。しばし蝋燭の灯りを百にも増しましょう。

651 幸せは今靄の中に浮かび上がりました。夢はまた静かに降りてきて、夢の中で貴女とお会いしました。

652 此世のことは心配せず、嬉しいこと、悲しいこと、様々な貴女自身の思い出を乗せて、先ず出発してください、紅蓮の小舟で。

653 天にいらっしゃれば未だ花なるご年齢の貴女、土の御座なども緋桃、緋椿で飾られています。[註⑤]

654 音を低くきしらせ、姉の棺を乗せた御車が後先を守られながら進みました。いたいけな姿の姪を抱いた母が来ました。[註⑥]

655 一番大切なのはこの御骨でしたか、などと話しながら姉上のお骨を拾い集め、残された六人は花をもって飾ったのでした。

656 兄上がお亡くなりになりました、と泣いて駆けていらっしゃった姉上が、五月も経たない中に、この有様になってしまいました。

657 まあるく桜の木の形に包む幻。その幻にもし人を近づかしめたならば、その人はきっと乙女の心になるでしょう。[註⑦]

658 これは私を躓かす道のうねりでしょうか。さらに夢は続きます。闇の中に藻の花が咲き、そこを流れていく私の袂、私の身体。

659 歌の命が、病みさらばえて腑抜けのあまり、あるか無きかになってしまいました、あの五月雨の頃は。

660 幾万の、尺に余る緋牡丹を敷きつめ、聖戦の勝利を祝って将軍は舞いなさいます。

661 一杯の御酒にも酔ってしまった勝ち戦さ。長白山を吹き下ろす山風が一層の興を広げました。

662 大和心にならい、美しい桜の花吹雪が散る下で、百人の朝鮮の武将たちが腹を切り裂きました。

663 勝ち戦さ、日本の将軍が敵の城を占領したのに、余りにもその御名が大き過ぎたので、その地に入ることができなかったとは。

664 血も凍るほど冷たい鴨緑江の水でお洗いなさいませ、片身離さずにお持ちになった絵筆を、歌いながら。

665 天が音を立てて揺らぎました。しかしおひと方が揃わなかった戦さ神。旅順港再閉塞の朝の出来事でした。

666 男神と女神との、ほんのしばしのおひろいでしょうか。森の泉に靄が立ち舞いました。

667 春の真昼、崩れ落ちる牡丹に夢は埋もれてしまい、私は意識が遠くなり、感覚を失ってしまいました。

668 春雨を吐いているかのような麦の穂の実り。その麦笛の音に輾転とすることからも、春の悲しさが分かります。

669 白牡丹、緋牡丹、褄濃ぼかしの女御さまのお袖。今が花の盛りでございます、とひたすらに私は申し上げているのですが。

670 あたかも靄の上に立っているかのような踏み心地です。瑠璃盤に百合の花が香る中、私は召されてお前に立ちました。

671 生き生きとした若草が生え立ち、孔雀羽の綾色の粉を撒き敷いた野辺に、私は謹んで御便りをお受けしましょう。

672 春は過ぎ行きました。孔雀も綾羽を萎めました。孔雀の羽が巻き起こした驕りの塵を掃くかのように、五月雨が降っています。

673 すっかり興ざめて過ぎ行く春は、人々に別れを告げました。しかし、青葉には飛び行きませんでした、蜜蜂の群れは。

674 私の思い出が砕けて散って渦巻いて、青野千里を風となって吹き抜けていきます。

675 華やかに輝きを放っている夜の境内の牡丹。牡の狛犬が笑っているかのように見えました。

676 影を長く引いた供奉の御車は母衣を上げました。乗っている公達の御袖はみな藤色で、夕日に映えています。

677 青葉を裂き、露を散らすような泣き声ですよ、時鳥、お前の声は。五月雨は人を老いさせる、と時鳥は鳴いています。

678 子の時鳥はすねて青葉に向けて泣き叫んでいます。親鳥と共に老いてきた春姫とは、声もなく泣いています。

679 静かに語って去っていった幻。しかしその幻は、靄に入るや否や急激に老いてしまったようです。

680 肌寒い夏です。芙蓉のような月に夏が泣いています。私も痩せたような気がしますが、寂しさ、と言った方が適切でしょうか。

681 強い浜風にも海水を焼く熱い砂にも身体をお厭いなさいませ。明日から千葉の浜に住む、歌を守る女神の貴女よ。

（しら梅の君を千葉の海におくるとき）―次の歌にもかけて―

682 お歌ができましたなら、汐の気を吸って歌と共に吹き出してください。それが夕虹となって山にかかるのを私は待ちましょう。

683 都鳥よ、文使いの仕事にお励みなさい。墨田川の堤には夕靄が香っています。

（しら桃の君におくる）

684 袖の隙間を留めてしみじみと聞く秋風の音。私も何かと人に忠告する姉の立場に立つことが多くなりました。

685 姉上に辛き思いをさせたのが気に病みます。ツバメが雨に濡れて巣ごもりをする、ある春雨の降る夕方のことでした。

686 春の海、潮干狩りの貴方と私。とにかくも互いの袂と袂とが恋をする一日となりました。

687 小船の灯りが水面に反射し、川岸の柳に映っています。折からの雨が小船に恋を運んでいるのでした。

688 あたかも黒髪が濡れて心細い様子に見える月見草。世を恨んでいるお方が魂となってかしずいているようです。

689 恋を促すように、岩屋の氷室は花々で一杯で、蜂たちが蜜をとっています。私も見倣って恋の歌の勉強をしましょう。

690 尾花が風に揺れ、目白の秋はうらぶれた様子になりました。そして歌に興味のない人々の声が響いています。

691 雨の日、川沿いの柳の下で木屋町の方を指さす娘が一人、その柳の緑に映える娘の帯の色、そして京都の町の何と美しいこと。

692 歯を染め、紅を可愛らしく引いて恥じらうように花を売っている女。その花売りの声にやはり京訛りがありました。

693 恨みごとをかこつのは、やはり秋のせいかしらと、試みに野分の吹いた夕方、私は虫の音を尋ねに野原に出かけました。

694 夕方の薄暗い空を真っ赤に焼いた天の火の下で、貴方を手に入れることができました、黒い靄で巻きながら。

695 葦が高く茂る入り江に夕日が弱々しくさしています。私の秘かに流す涙も年を重ねました。

696 恋ゆえに何人もの女が沈んでいる琵琶の湖。姫神さまが嫉み住んでいる竹生島のせいかも知れません。

697 恋人に手を引かれての初の旅、若き身の裾は露に濡れます。十九の娘の菅笠が京を落ちて行きました。

698 鐘に逃げ入った、その恋の姿を夢に見て、私は十年を寺で過ごしました。しかし鐘を突くばかりで痩せ衰えてしまいました。

699 偶然にも魔物が呼び交わす声を聞き、私は戦きの余り桜の木に縋りました。桜吹雪が私の震えを止めてくれました。

700 雨が寂しく降ります。誰かに詫びようとして降るのでしょうか。そんな雨の心も知らないで、海棠はただ雨の中に立っています。

701 木霊よ、また返って来ておくれ。秋は寂しい。私が袖を裂くほ

どの苦悶の歌を作っている、と世間はお思いになるでしょうか。

702　木犀の下に雨の一夜を借りて過ごしました。絵筆をとる身の私ですが、そこで自分の至らなさを知りました。

703　そうに違いない、と無理に押さえて胸は鎮めましたが、夜中に疑いの心がまた蘇り、涙は寂しく流れました。

704　月の照らす神社に、姉と一緒に来ました。夕顔の咲く中、何も言わず語らずに、人は別れて行きました。

705　何時の間に私は胸の揺らぎを覚えたのでしょう、読み始めてまだ日の浅い「乱れ髪」の歌集に。

706　湯上がりの乳房を拭いていると、御粧殿の御簾が揺れました。庭の露草は紅い種を落としてくれたでしょうか。

707　磯萩を袖に包んで砂浜を一里歩きました。秘めた恋を懐いている私の歩みに、風は背中を押してくれました。

708　萩は咲いたのに野田は秋の気配がしません。昼寝から覚めましたが、捨て去ったはずの恨みごとがまた襲って来ないでしょうか。

709　人には様々な想いがありますので、秋は木の葉の落ちる音にも人の涙を誘う響きがあります。太陽が何と黄色いこと。

710　百合の花の中に、私は身を預けて入りました。私も鈴虫のように百合に置く露を吸うのでしょうか。

711　鈴虫の声に私の淋しい夢は守られています。夕顔が痩せ細って咲き、初秋の風が涼しく吹いています。

712　露を吸い、まだ足らぬ思いで蘂を噛み、袖口を噛みしめて泣きました。しかしいくら泣いても他に残されている道はありません。

713　酸漿の小枝を帯に挟んで笹色に、月灯りの下、私は紅屋の暖簾を潜りました。

714　赤ん坊の枕蚊帳には、紅縁が燃えるような百合の刺繍模様。産屋に吹き渡れ、初夏の涼風よ。

715　今日は六斎日、囃し浮かれて虫送りをする日です。若衆揃いの行進に稲穂も波打つのでした。

716　虫たちがすだき、約束の時間に急いだ昨夜の野道。今日は月が明る過ぎるので、目深く手拭いを置きましょう。

717　憂しとては楽しとては何につけ、夜中じゅう、どれだけの虫たちが月を見て遊んでいることでしょう。

718　飛び飛びに撫子の花が咲く一里余りの道の先。薄月の下、私は萩の花と別れて川を渡りました。

719　霧の中、霧の御声のたゆたいに私は身を任せました。その間は、一瞬の神の声すら許したくはありませんでした。

720　貴方が私を待ったのでしょうか、私の方でしょうか。寄れば互いに手に手をとって、募る恨みも大空もすっかり晴れていきます。

721　夕顔に片頬を背けて泣いていらっしゃる貴女。その貴女の額に、星よ降れ。月は仄かに照らしています。

722　遙か遠い星、そこに住む何方に向けてお手紙を書いたらいいのでしょうか。私がこの世に生まれるまでいた古里の星の何方に。

723　私の髪が長く雲に靡いていく思いがします。私を巡って、入り日と風とが雲に恋のさや当てをしています。

724　これからも私は、幾秋にわたってこの想いを繰り返すでしょう。

725 泣くほどの想いが溢れた、古手紙一つも残ってはいませんが。
人は皆おなじことだ、と分かっていますのに、私はとても困惑します。それは秋の落ち髪、日毎に増えていくのです。

726 竹が切られ、流れゆく水が広がって行きます。秋が来ました。
雁に実らない恋文が運ばれて行く、そんな秋が。

727 貴方に別れを告げ、私は絵筆を持って秋の旅に出ます。この恨みを捨てる野辺は何処にあるのでしょうか。

728 磯は久しぶりです。千鳥、磯鳥、浜茄子。これらは私たち二人を彩った、詩の切掛け、恋の始まりでした。

729 布切れに瓦を包んで錘にし、人の才能を量る秤。そんな棒秤の糸に私は釣るされました。

730 この世に生まれてきて、母の膝の上で習得したのが私の歌です、と答えましょう。たとえ拙い私の歌であるにしても。

731 世間が鋳造するというのなら、私も一つの形に、一つの香りになって、人間の形をして竈を出ましょう。

732 高く身を持して、私は夕焼けの色を袖に染めました。私を嘲った人たちには塵が飛んでいくようです。

733 この世が続く限り、歌がある限り、私は決して忘れはしません。
この私への誹り、辱めを。

734 現実の地にはありません、歌の中にだけ見る幻のもの。その幻が余りにも美しいので、それを恋と呼んでください。

735 女が一人で生きるには余りに淋しすぎる秋の夜です、と思わず筆が誘って私にこう書かせました。でも、それは幻影なのですよ。

736 百舌が鳴く秋の夕暮れと、私はいつものごとくそれを聞いていましたが、田から吹いてくる風は、呪うように寒いものでした。

737 世に果たすべき務め、そんなことは私は知りませんし、考えもしません、文字を書く仕事が充足すればそれで私は嬉しいのです。

738 書を読んで智慧を売る子として私は生まれて来ませんでした、蛇の薄衣が価値のあるこの世界には。

739 似なくていいのです、習わなくていいのです。成功したものの、心はほとんど虚ろになってしまった、そんな人の成功の暁をば。

740 読めば私は満足で、満足しても用には立たない空の文字。人はいつからその値を定めようとし始めたのでしょうか。

741 吐く息には雲も動かそうとする思いがあります、あの方の命を包んでいる胸から吐くその息には。

742 伊勢物語の御講義、何を躊躇ってのお声の乱れでしょうか。先生の白き御髯に、菊の香りよ、吹き寄せておくれ。

743 互いに触れあっては花々が頷き合う春の日でした。木の葉も擦れ合い、山全体が夕日に輝きました。

744 いつの日か、思い出をまた華やかに飾りたいものです。私たちを指さす人々に向かって、笑い戯れましょう。

745 これほどまでにむごく私を呪う世の中でしょうか、嫉みからでしょうか。人の口が毒を吐きます、風の吹く八衢で。

746 歌を詠んだので罰せられました、と先ず書き残しましょう。幾万年後かにご覧ください、この今の世の有様を。

747 先生と友と私とが詠んで成った、それで満足の歌集、そんな歌

集にどんな危険があるというのでしょうか。

748　幸いなことに涙の奥に潜ませていた命は、強い声で答えたのでした。歌こそ命です、と。

749　人々よ、私を怖がらないでください。雨に幸せを説いている淋しげな秋の浪よ。私を舟に導いてください。

750　人には恥ずかしいことです。人の話を聞いて貰い泣きした涙より、私事で思わず流した涙の方が余りにも多くなりましたことが。

751　つい先程まですっかり忘れてしまっていた人に手紙を書いている秋の雨の日。過去の時代が古びてしまい、涙が流れて来ます。

752　私のこの細い指に、筆を持つ力が余りにもありません。そして風がこの小さな火影を嬲るのです。

753　岩室の中で溶けていくほどに眠りたいものです。夢見ることもせず、火もて焼かれて。

754　吹く風に私の涙を含めましょう、二百里の彼方まで。でも母には、送られた小袖を着て暖かくしています、と伝えておくれ。

755　黄昏れてしまいました。鐘の音は森を越え、淋しい黄昏を追うかのように響いて行きます。

756　もし蜘蛛の糸に引かれたならば、それで十分に足りるほどの微かな幸せでした。私は小さな我身を顧みてそう思いました。

757　翼を堅く閉じ、雨に打たれている梟。巣に籠もる小雀が恐れ悩むのがその夜の梟なのです。

758　千年を経て再び呼び返されるような、そんな評判で死ぬのならば、私は今の世のあらぬ非難も黙って受けましょう。

759　牡を誘って瀬で羽を洗っている鶺鴒。その鶺鴒の飛石に白桃の花が散っています。

760　ああ今日の、この人々を前にして笑わなければならない捕虜たち。その胸の中はどんなにか冷え冷えとしたものでしょう。[註⑧]

761　うなだれて雨音を聞けば、なんとも淋しい春の夜です。花を打つ雨となったのでしょうか、私が落とす涙は。

762　鶯籠に水差などを揃えて吊した桃の木蔭。そこから私は見たのです、朧に霞んだ遠くの山々を。

763　今日の私は、昨日までに得た名声に欺かれて、夕宵寒い野辺に寂しく送られました。

764　まだ寒い春の夜です。私の胸の中に鳥の巣がある心地がして、抱いて暖炉を入れました、鶯の籠に。

765　薄い紫の朝霞がかかる葵橋。その橋の上を、房の襷を掛け、花を頭に頂いた花売りが通ります。

766　朧月がためらいがちに桜を照らしている祇園町。都踊りの囃しの音で夜が更けていきました。

767　草餅に辻占を添えて売ってくれた大原女。その辻占が高雄にいらっしゃるあの方を、初めて私に意識させたのでした。

註①　「山川登美子の歌(1)―『白百合』全釈―」（『福井大学教育地域科学部紀要第Ⅰ部人文科学（国語学・国文学・中国学編）』平19・12）

「山川登美子の歌(2)―『恋衣』拾遺・『明星』掲載歌―」（福井大学言語文化学会『国語国文学』第四十八号、平21・3）
「山川登美子の歌(3)―初期投稿歌、『恋衣』以後の『明星』掲載歌―」（『福井大学教育地域科学部紀要第Ⅰ部人文科学（国語学・国文学・中国学編）』、平21・12）
「山川登美子の歌(4)―『詠草』三四七首―」（福井大学言語文化学会『国語国文学』第四十九号、平22・3）

註②　釈迢空「女流の歌を閉塞したもの」（『短歌研究』、昭26・6）

註③　原歌は三字分が翻字不能であるが、仮に「たとへ」と補って訳してみた。

註④　全集には〈以上の二首は、登美子の長兄久太郎（山川家八代目）が明治三十六年七月二十六日、数え年四十一歳で病死したのを偲んでの作〉、との注がある。

註⑤　全集には〈以下の四首（653～656）は、登美子の長姉河いよが明治三十七年三月九日、数え年四十歳で病死したのを悲しんでの作と思われる〉、との注がある。

註⑥　原歌は一字分の翻字が確定しないが、「輿カ」とあり、それに従って訳した。

註⑦　原歌は一字分が翻字不能であるが、仮に「近」と補って訳してみた。

註⑧　原歌の翻字に「笑まんりよ」（ママ）とあるが、「りよ」を「虜」として訳してみた。